

「銀河とその仲間たち」

刑部憲暁

1 銀河を歩いていると

銀河を歩いていると
まるで凍った河の上を
滑っているようなんだ

銀河を一人で歩いているとね
深い河に
足を取られて
いつの間にかぼくは足を
無くしたような気がしてくる

銀河が流れてゆく
ぼくの足をさらって
ぼくの身体をさらって
それでも銀河は流れてゆく

2 静謐の河

銀河に寝そべる星の子は
頬杖ついては考えました

「ぼくはひとりぼっちなんだから
ひとりぼっちにならないといけない」

静謐せいひつの河に頬杖ほぢぢついた星の子の姿は

蒼くひかりながら流れます

銀河にやすむ星の子は
天上の雲を指折り数えて呟きました

「ぼくはそれでも光っているかな？
光っているなら そのままでいよう」

指折り数えて呟きながら
淡くまたたき流れます

銀河に眠る星の子は
夢にピンクの星を見ました
見たこともない愛らしい星で
その輝きは本物の夢みたいで
（もちろん本物の夢なんですけれど）
眠気ねむけの星を夢見ながら ひとつ
水色のひかりを落とします

3 その人が目を覚ましたら

「ぼくもだれかの夢かもしれない」

星の子は読んでいた本を
膝に置くと
とおい銀河のひとすみを
さがすような眼をしました

「ぼくもきつと だれか
すてきな人の夢のなかに住んでいるんだ」

「その人はどんな人だろう」

美しいだろうか

その人はきつとやさしい人にちがいない

その人が目を覚ましたら

ぼくは消えてなくなるだろう

その人の昼の世界を

一度でいいから見てみたい」

星の子は

いつまでも

とおい銀河の果ての果てを

さがすようにしているのですた

4 手紙

ぼんやりと

銀河をながめていた星の子は

はつとして起きあがりました

「そうだ 手紙を書こう

ぼくがゆめ見ているひと

ぼくをゆめ見てくれるひとに

手紙を書こう」

「あなたのことを想っています

あなたのことをゆめ見えています

あなたのために祈っています

一度 あなたのゆめから

出てみたい

夢のそとで あなたの

手をそつとにぎりたいたい」

星の子はなんだかそのひとが

すぐ傍そばに立っているような気がして

うれしいため息をつきました

流れ星にひかりのことはで書きこむと

ひとつを 地球に落としました

人はそれを

ほんのまたたきするあいだ

夜空に流れる真一文字と読むでしょう

星の子はそのことを

まだ知らずにいたのですた

5 ぼくが居るよ

ぼくが居るよ

いつもぼくが居る

星空があればそこに

ぼくは寝転がって

鼻歌でも歌って

のんきにやってるのが

見えるかも知れない

時々

居眠りなんかしちゃってね

ぼくが居るよ

いつもぼくが居る

あなたの傍に

あなたのすぐ傍に

6 輝いてごらん 太陽

こんなに太陽に近づいたのなんて
ずいぶん久しぶりのようだ
太陽の眩きも聞こえてくるし
身内の温もりはまっしぐらに春めいて
太陽の明るい笑顔に共振する

太陽は詩について考える
「どうしたら詩が書けるの」

「それはね 太陽
輝きを 輝かせればいいんだよ
太陽の思いを 書けばそれが詩だ
だって太陽は
もう太陽だというだけで
十分に温かいし
眩しいんだから」
「輝いてごらん
ぼくの前で
ぼくの太陽」

7 太陽の声

いつになく銀河は
眩しいほどに輝きを放ち
眠っている星の子の姿も
そのままゆいばかりの
ゆらぎの中に溶け入って
星の子は
ひかりになりました

それは

太陽の音が
ほのかに紅色べにいろに染まりながら
銀河の辺りを
一面に照らし出したからなのです

眠りの中で

あるいは覚め切らぬ夢の波間で
星の子は微笑んでいました
そうして本当に

寝顔のままの星の子の頬には
小さな小さな窪みさえ
伺うかがい知れたのです

太陽の紅色の音色が
心地よく静かに響き渡り
しばらくの間
銀河の辺りにはより一層の静けさと
深い安らぎとが
溢れたのです

8 妙なる調べ

ある日星の子は
胸を高鳴らせて
まるで遠慮のない流星群の
突然の訪問を受けたかのように
銀河の布団をはねのけました
心臓の赤い星が
大きく小さく瞬いて

ほうき星みたいな息のかけらが
いくつもいくつも 飛び出してゆきます

それは

銀河と銀河とが

交叉する刹那に起きた

妙なる調べの仕業なのでした

なんて愛しい光景だったことが

美しい銀河は寄り添って揺れました

優しい歌声のように星は流れ

行き交うのです

燃えているのです 銀河は

炎なのです 銀河たちは

星の子は初めて

銀河にその温もりのある理由を

目の当たりにしたように思い

銀河の中に

その闇の中にさえも

溶けて行きたいと願ったのでした

9 花びらの滑り台

星の子は

去年の押し入れの中から

桃の花と 桜

それに紅梅の花びらを取り出して

両の掌を飾りながら

暫くの間見つめていました

それからにっこりと微笑むと

花びらの一枚一枚を手に取り

銀河の星くずの一粒一粒に

ていねいに貼り付けていったのです
銀河の彩りを変え終わると

その鮮やかな流れを

そっと地上に降ろしてやりました

こうして春の仕度は整い

星の子は

花びらの滑り台を滑りながら

地上に降り立つ日を迎えたのです

10 ある土地で

「もしもぼくが春をやるなら

世界をピンク色に染め上げて

若葉の色も添えるでしょう

薔薇のための居場所も

準備しておけば

それこそ銀河の定めにも則った

正しい春の姿になるでしょうね」

星の子は艶やかな鳥たちに

そんな説明をして

ちようどそこへやって来た風を首に巻くと

背を向けて春の元へと

帰って行きました

黄色い陽が

陽炎と共に立ち昇る逆光の中で

透明になった星の子は

少し 泣いているようにも

笑みを湛えているようにも

見えたのでした

その場所は地球の上の
かつて訪れたことのある土地で
そのころには春の花咲き乱れる
心地よい 愛らしい 草原だったのが
今は艶えんに冬枯れて
鳥たちも息切れて
枯れ草の奥うすに蹲すくまっていたのです

11 銀河の垂水たるみ

春の片隅には
今は遠い
冬山の雪解け水の進ほしむような
人恋しげな銀河の垂水も
ひっそりと隠れていました

星の子は
はるばる旅を続けておりましたから
時折はそのような春の日影に
立ち寄ることもありました
まだ寒々としている暗がりに横たわり
星の子は
透明な銀河の滴したたりに
口を開くのです

すると聾こく
あの懐かしい夕焼け空の
遙はるかな味わいも
静かに息を潜めて

そっとたゆたっているのです

12 夜空を見上げてみると

夜空を見上げてみると
その人の眼差しが
見える時がある
桃の枝振りのように華やぎ
夢見るような瞳の下に
遠いその人の
心を宿す瞳
冬の間
休みなく捜し続けていたぼくの
たましいとからだは星空を離れて
横たわったまま
その人の瞳の輝きが
春の霞のように
包み込む
少しの寒さは厭わない
その人の輝きは
ぼくを温め
ぼくの身体に染み入り血となり
ぼくの甦りを
小鳥たちの囀りのように
囁き続けているから

13 空白は語ります

「ぼくが 夢見た人は
この宇宙の人じゃない

ぼくが夢に見た人は
どこかにある宇宙の軸から
抜けてゆく別の世界の人なんだ」

その人の髪は星のように流れ
その人の眼差しは朝日のように昇り
その人の声はせせらぎのように光る
そして

夢へ向かって放たれる
黒く、深く、艶やかな瞳

「ぼくの銀河は知っているかな
その世界の入り口や
ぼくとその人の幸福について」

星の子は
左手を銀河の流れに忍ばせました
銀河に沈めた左手を
ゆっくりと回してゆきます
銀河は揺ぎ混ぜられながら穏やかな音を立て
しかし、夥しい時間の雫を
振り払いつつ回り始めます

星の子の人差し指が触れたのは
一つの特異な星
空白という名の
強い輝きを持つ純白の星でした

空白は語りました
「あなたの全てが失われるかも知れない
あなたの何もかもが変わってしまうかも
あなたの手に触れるものすべては

未来の坩堝の中で溶ける
あなたの勇氣は試練に晒され

あなたの運命は切り開かれる
あなたの過去とあなたの未来は
すっかり似る所が無くなるでしょう
あなたが
もしそれを望むなら
あなたの未来はあなたの前に
空白を用意する」

星の子は にっこりと笑いました
なぜなら
星の子には何もなかったから
銀河とそこで夢見ている
長い静かな時間以外に
何一つ持たずに居たのですから

14 こんにちは

星の子は夢を見ました
その人の姿を垣間見ました
その人は「こんにちは」と
言ったように思えたので
星の子も「こんにちは」と
言ったのでした
でもそれは
ほんのわずかな
ほとんどまたたきするばかりのあいだの出来事で
夢は忙しげに走り去り
星の子は再び
音のない銀河の世界に
目覚めてしまいました

「あの人はどうだろう」
と星の子は思うのです

「あの人は寂しいと思うことは
ないだろうか

もしないとすると

ぼくはちよつと

寂しいかも知れない」

「夢はどうして

あんなに忙いそがしいんだろう」

と星の子は思うのです

「いつもいつも

やっと来たかと思うと

明け方だからと言っては

駆け出して去いってしまう

後に残される夢見る人の身にも

なつて欲しいものだ」

星の子は珍しく

口をとがらせて

太陽を遠く見やりましたが

それもそのはず

垣間見たその人の笑顔が

春の陽気のように

花びらと風と明日への想いのように

星の子の胸の赤い星を

貫いていったからなのです

15 あの人に夢で逢えたとき

星の子は時折

こんな考えに耽ることがあります

「ぼくの棲むこの世界について

ぼくはどんなことを知っているかな

あの人に夢で逢えたとき

ぼくはどんなことを

教えてあげられるかな

あの人の住む世界と

ぼくの住む世界とは

似ているだろうか

それとも

少しも似ていないかな

あの人も例えば

ぼくと同じように生きているのかな

その一日を 通り抜けるのが

とても怖かったりすること あるのかな

未来のどこかに 楽しみを隠して

わくわくする火の星を胸の内に抱き締めて

小走りに一日を過こすことは

あるのかな

自分の大きな銀河を持って

一生のその使い道に

真剣に悩むことはあるのかな

何もかも忘れて光の絨毯に寝そべって

馬鹿みたいに宇宙を見やったり

なんてことは

それはぼくしか しないかも知れない」

星の子はちよつと

紅く光りました

16 虚空

何か特別なことが近づいている

これまでに無かったことがやって来る

星の子は

銀河のざわめきを見つけると

初めて春を迎えた若葉のように

起き上がりました

どうしても

今までに無いこと あり得ないことが

自分の身に起こりそうなのです

星の子は

立ち上がり 向き直り

ざわめきの奥へと進み入りました

その 星雲の内側の

強い波を発している

発光体に そつと触れました

しびれるような感覚が

星の子の光を揺さぶります

それは時の結晶でした

その もう一つの時は

透明な球形の

水晶のような星

星のような光

光のような虚空なのでした

星の子は座り直し

膝の上で

それを 掌で支え

見入りました

「これがぼくたちの時間

これがぼくたちの幸福なんだ

この光がぼくたちの運命」

星の子はその光に

大切な想い出のある音楽のようにして

聴き入りました

17 三つ目の宇宙

「夢を見るとき

ぼくは光の速度に身を委ねる

光は宇宙の根っこなんだ」

星の子は

純白の虚空に触れながら

思うのでした

虚空に手をかざしてみると

掌は 二つにも三つにも

分かれてゆくのがわかります

「この中に入って行けば

ぼくは光の速度になって

二つ目 三つ目の宇宙に

生きることが出来るだろう

二つ目の宇宙はどんなだろう

三つ目の宇宙は賑やかだろうか

あの人は どちらかの宇宙に住むのだろうか

ああ でも

ぼくはいつもその人を身近に感じている

ここにはいないその人は

この宇宙ではない世界の

ぼくの すぐ傍らかたわに息づくのがわかる

ぼくにはその人の
そっと囁く声が
この宇宙に生きてある事への
最後の手当てのように
この銀河の果てまでも巡る
慰めの旋律のように感じられる」

18 希望の色

「春の太陽は
希望の色に輝くから
ぼくの持つている
純白の虚空も
どこか似た色合いに見える」

希望の色は
希望の旋律を奏でます
星の子は
虚空に耳を寄せました
二つ目の耳と 三つ目の耳が
静まり返り
すると聴こえる音色は
少しもの哀しいメロディ
それでいて春の風のように
温かく星の子を包み
その頬を撫で
背を押すような
仕草をするのでした

星の子は
虚空に頬をすり寄せました

すると三つ目の耳ははっきりと
その人の声を聞いたのです
いえ 声のない言葉を聞いたのです
その時
星の子は光になりました
虚空は消え 気が付いたとき
もう星の子には
それがどの春なのか
分からなかったのです
銀河だけが 変わらずに
流れているように見えました

19 もう一人の星の子

「ぼくはどうしてここにいるだろう
ぼくはどこからここに来たろう」
星の子はひとり
銀河の上に坐りながら
辺りを見回し
胸の赤い星を見つめては
またたきました
何か
とても大切な事柄が
この銀河の上から
こぼれ落ちているような
あるいは
そこにあるはずのものを
自分がすっかり見逃しているような

気がしてならないのです

すると その時

背を向けた姿のその人は

待っていてくれたのです

こぼれ落ちていたもの

失くしていたもの

星の子は

もう一人の星の子を

見つけ出しました

もう一人の自分は

美しく輝き

優しく振り向き

嬉しく傍に立ちました

星の子は

自分もまた銀河であったこと

自分もまた流れる歓びであったこと

自分もまた

流れ星を心待ちにし 生み出し

何も無い宇宙の暗い闇に

光を書き込む

銀河の一つであることを知りました

二人の星の子は

互いのかたわらに立ち

そして宇宙の暗いキャンパスには

今まであったことのない

これから決しないであろう

初々しくも果てしない

銀河のほとばしりが描き込まれたのです

「もう 夢は要らなくなった」

一人の星の子は考えました

「もう 夢は消えなくなった」

もう一人の星の子は呟きました

どちらの言葉も

愛らしい流れ星になり

私たちの夜空に

幸福の印を刻みました

20 笑顔

星の子が いつものように

銀河を背にして 寝そべっていると

もう一人の星の子は

優しい天井のような星空となり

静かに見つめているのです

星の子が いつものように

銀河の流れを切りながら 歩いていると

もう一人の星の子は

清らかな光の流れに身を変えて

星の子のくるぶしをいたずらして 撥るのです

もう一人の星の子が

惑星に似た穏やかで

澄んだ音色の歌を歌うと

星の子は

瞳の色を強めながら

風のない宇宙に向けて

眼を細めているのです

もう一人の星の子が

あの彗星が 慌あわてて駆け寄る姿を見つけて

くるくるとよく回転する笑顔を見せていると

星の子も

何もかも忘れたように

太陽の黒点のような微笑を

人知れずそつとお返しに差し出すのでした

こうして 星の子は

哀しい時間のあることも

寂しい場所のあることも

今はすっかり

忘れてしまえたのでした

21 星の子の居なくなった世界

星の子の居なくなった世界では

桜になった銀河は満開の花を付け

賑やかな流れ星を

まるで一千年に一度の

祝祭日を祝うみたいに

振り撒いていたのでした

辺りの空気もざわめいて

それこそ風が吹かなければ

どうにも収まりのつかないといった

どこか

留め金の外れてしまったような

何か

在るべきものを捜している風な

そんな日々が流れていたのです

春は待っていたのです

星の子を

星の子の帰還を

私たちも同じでした

星の子が二人で

この世界の空に住んだならば

春は満たされ

ざわめきは鎮まり

風はずつと大人しく

葉蔭に休らうようになるでしょう

あの純白の虚空だけは

そんなときにも

訳知り顔に無邪気な光を

闇夜に放ち続けているのでした